



「第二次日本経穴委員会」便り

～第52回 初志～

第二次日本経穴委員会・作業部会委員 かわはらやすひろ
河原保裕

はじめに

2008年5月30日に『WHO STANDARD ACUPUNCTURE POINT LOCATIONS IN THE WESTERN PACIFIC REGION』が出版されて以来、昨年末まで『WHO/WPRO 標準経穴部位—日本語公式版—』の作成を手掛けてきた。「日本語版」を皆さんにお届けできるのも、まもなくだろう。

発足当初を振り返って

2004年5月に第二次日本経穴委員会が発足され、(社)日本鍼灸師会から運営委員として学術局長である小松秀人氏、作業部会委員として私が参加させていただいた。発足当初、第二次日本経穴委員会に対していくつかの疑問を持って参加したのを今でも覚えている。委員会最初の会議で、委員長をはじめ多くの委員に質問させていただき、もしかしたら会議初日からメンバーに不快な思いをさせたのではないかと今でも懸念している。おそらく、読者の皆さんが「経穴の統一」、「日中韓3カ国で経穴に相違」などとメディアに登場した時に感じた疑問と差異はないと思う。

しかし、K先生から私の疑問を払拭するアド

バイスをいただき、迷いもなく真摯に経穴委員会の作業に取り組むことができた。名を明かすことはできないが、K先生には今でも感謝している。「日本語公式版」ができ上がった今だからこそ、初心に戻り、その時の思いとK先生からのアドバイスをいくつか紹介したい。

いくつかの疑問

経穴を定める意味での再確認

Q：古典に記載されている経穴を現代医学的に定めたいのか？ 臨床で扱う経穴の基準を定めたいのか？ 臨床で扱う経穴の基準を定めるのであれば、基準点、基準線、基準尺度はどこまで細かく必要なのか？ 国によりまた同国でも流派により経穴の位置が異なるが、その基準となる経穴を定めるのが、この委員会の目的か？

K先生からは「今回のWHO/WPROの会議は、鍼灸を世界の人の健康・福祉・医療に活用させるための会議である。ただ矛盾点も多く含んでいるので、鍼灸の古典に帰り一つ一つ合意できるように解決していくことが大事である。なぜ古典かといえば、鍼灸は古典＝伝統医学だから。ツボには個人差があり、同じ個人でもその時々で位置が変わる。それゆえ、触覚、感性を

磨く努力を日本の鍼灸師はしているはず。学問と臨床は別と考え割り切っているところが臨床家には内心あると思う。極論すれば、手で触って感じるところが大事で、何センチ何ミリというのは臨床家ではない。『成書の経穴部位は方角を示すのみ。経穴は効くものではなく、効かすものである』と言った深谷先生の名言は最高の言葉だと思う」とアドバイスをいただいた。

古典文献資料に関する再確認

Q：最も古い文献に従う根拠は？ またそれが正しいという根拠は？ 『黄帝内経素問・靈枢』の著者は不明（複数？）であるし、『鍼灸甲乙経』の著者・皇甫謐をはじめ、異なった時代に異なった人が書けば、見解も内容も異なる可能性があるが、今回『黄帝内経素問・靈枢』、『鍼灸甲乙経』等を参考文献とする根拠は？

K先生は「文献の問題は一番難しいものがある。本を集めて並べて文字の足し算、引き算しているような文献も散見できる。版本学、校勘学、文字学、押韻学など難しい専門レベルの古典研究がないまま、古典文献を集めてやっても有害無益である。ただ、鍼灸＝伝統＝古典なので、古典の勉強はしているが、古典にこう書いてあるから絶対にこうでなければいけないというものではない。古典はそんな簡単に理解できる代物ではない。もうひとつ古典を勉強する意味は、古典は我々の知らない途方もない鍼灸術が残されている宝庫であるから。そういう意味で勉強していかないと、西洋医者の知識レベルで鍼灸を使われてオシマイになっていくように思えてならない。50年前では古典とはいえないが、あの頃でさえ、鍼灸で結核、マラリアなど見事に治療していた事実があったわけだから」とさらなるアドバイス。

他にも多くの質問をさせていただいたが、K先生をはじめ各委員からも助言をいただき、自分なりにその意味を解釈し作業に取り組んできた。

今回の作業目的は「歴史と現実の両方を尊重する“respecting history and reality”の原則に則り、あくまでも経穴（腧穴）の体表部位の世界標準を決定すること」。つまり世界どこの国であれ、どの流派であれ、グローバルな基準となるものを作り上げることである。臨床では、同じ患者でもその時々によって、また疾患によっても経穴の反応は異なる。それは経穴の大きさでもあり、深さでもあり、方向性でもあると考える。

本当の意味での統一を図る（実際には非常に困難である）には、その経穴が人体に及ぼす作用機序のみならず、人種、性差、年齢また病期での反応差など、多くの研究が必要と思われる。後世、このような研究が進み、ひとつでも解決され、多岐にわたる鍼灸治療の効果に関する有効なエビデンスを確立するためにも、今回の体表部位統一は必要不可欠な要素であったと考える。

おわりに

この「日本語公式版」が世に出ることが我々第二次日本経穴委員会の大きな節目になることは間違いなく、大きな仕事をしてきたという自負はある。しかし、日本国内の問題としてもいくつかの問題が残っている。経穴の読み、主治症等である。今後、しっかりと時間をかけ、これらの研究を行わなければならない。

長い歴史の中で、今回の出来事はほんのわずかな一歩である。鍼灸医療が、世界でも日本でも認められるために、今後も確実に一歩一歩進み続けなければいけない。